

おばけの季節【悪夢篇】

陽羅 義光

みなさんは夢を見ますか。

「夢と希望」とかいうあれではなく、眠っているときの話。

その夢は楽しい夢ですか、それとも厭な夢ですか。

厭な夢の場合は、悪夢ですか、悪夢といってもいいものですか。

私は一時期、とはいえそれは三十年間に亘るものですが、毎晩（晩にかぎらず仮眠のときも）悪夢ばかり見ていました。

どういふものを悪夢というかはともかくとして。

どうして悪夢を見るのでしょうか。

フロイト、ユング。

夢の専門家は難しいことをいっていますが、悪夢を見ない方法というのはなさそうです。

もしあったとしても、簡単ではない。

フロイトやユングもむろんのこと、その時代には解らなかつた、「レム睡眠」や「ヒトゲノム」の件もまだ模索中といってもいいか。

ですから最近では、鬱病やトラウマやストレス、さらにPTSDと悪夢の関係の研究が進んでいるらしいが、謎はまだ残っています。

いささかでも謎があるということは、おばけがいるということにつながります。

現実でも、おそろしいことがあつた時、おそろしいものを見た時、ひとはよく、「悪夢じゃ」

と叫びます。

ということは、悪夢とおばけとは、おそらく無関係ではなさそうです。

また、自殺未遂者の七割は悪夢を見ていたという調査結果があり、被害妄想や自殺志向と悪夢との関係も云々されています。

ですから、専門家は「悪夢障害」ということがあります。

悪夢には未だ謎があり、とにかくおそろしい。

そのあたり、懐爺ならどういふ蘊蓄（うんちく）をたれるのか、愉しみでもありませんし、悪夢の専門家よりもあんがいの的を射たことをいってくれそうです。

それではあとは懐爺におまかせしましょう。

禿光山人 拝

* * *

「かいじいはおるか。いきとるか、しんどるか」
「死んどります。ではまたいずれ」
「いずれでは、ほんまに、しんどるかもしれん。なんでもかんでも、いきとるあいだが、かんじんじゃ」
「それで、肝腎なこととはなんでしょう」
「あくむのはなしじゃ」
「悪夢、ですか」
「かいじいは、あくむを、みんなのか」
「ほっほ、悪夢以外は見ませんねえ」
「そらあ、ふこうじゃのう。わしとおんなじじゃ」
「金ちゃんと同じとは、光栄ですね」
「おせじはいらん。あくむのはなしじゃ」
「悪夢はどうして見るか、ですかね」
「あたりじゃ。さすがはかいじいじゃのう」
「お世辞は要りません。お互いこれだけ、おばけに逢って、お互いこれだけ、おばけの話ばかりしていたら、それは夢にだって、おばけは出て来ますよ」
「あくむは、おばけか」
「断固、おばけです」
「かいじいは、なんでもかんでも、おばけにしちまうからのう。だから、おばけのせかいからの、まわしものなんていわれるんじゃ」
「知りません、聞いていません」
「とぼけるなや」
「知りたくありません、聞きたくありません。噂ほど不愉快なものはありませんねえ」
「わしは、ゆかいじゃ」
「少なくともわたしは、おばけの世界の宣伝係かもしれません」
「そうじゃ、そうじゃ。かいじいが、せんでんぶちょうで、わしが、せんでんかちようじゃ」
「金ちゃんが部下なら、こんなに頼もしいことはありません」
「だいたい、よのなかが、わるくなるのは、かがくしゃと、ぶんめいじんの、せいじゃ。なによりも、おばけぎらいじゃもの」
「おばけにしなさすぎる専門家が多すぎます。心理学者も精神科医も、悪夢に難しい理屈をつけますが、悪夢に出て来るものは、みんなおばけです。しかもそれをお

ばけがやっているんです。そう普通にかんがえれば、下手な理屈は要りません」
「あくむは、おぼけか」
「悪夢は、自分の心のなかのおぼけが、睡眠中にふと顔を出す現象です」
「こころのなかに、おぼけがいるんか」
「正確には、心のなかにしか、おぼけはおりません。現実現場に見えるおぼけも、心のなかのおぼけが、そとにとびだしたときなんですね」
「かいじいの、こうしゃくは、むずかしいのう」
「学者や医者ほどに、難しいことはいいません。金ちゃんの見る悪夢は、金ちゃんの心のなかにいるおぼけが、眠っているときに、その夢の中に出て来るということなんです」
「だば、どうすりゃええのかのう」
「悪夢を見ないようにするのは、善夢を見るようにするのと同じくらい難しい」
「ほうほうは、ないんか。わしは、いっしょう、あくむに、なやまされるんかのう」
「悪夢のおぼけも千差万別ですから、おぼけそれぞれ、すくなくともおぼけの種類によって、悪夢のおぼけ退治が成立します」
「だば、どうすりゃええのかのう」
「金ちゃんの悪夢、その主だったものを、いくつか教えてください。各々の対策をお教えしますから」
「なるほどのう。かいじいのはなしは、せつとくりよくあるのう」
「金ちゃんはわたしを、【うんちくおぼけ】とでも、おもっているのでしょうか」
「あたらずとも、とおからずじゃ」
「とても眠くなってきました。悪夢おぼけのなせるわざでしょうか。これからまた悪夢を見ることになるでしょう。それでは明日また」
「あすは、いきとらん、かもしれん」
「解りました。ではおつきあいしましょう」
「いいへんじじゃ。かいじい、きょうは、げんきじゃのう」
「空元気というものです」

「わしのよくみる、あくむは、このよにおる、ぶきみなむしというむしが、わしをくいにくるものじゃ」
「どんな虫ですか」
「けむしもおる、むかでもおる、うじむしもおる、ごきぶりもおる、こおろぎもおる、いなごもおる、かまきりもおる、だんごむしもおる、むしずのはしるむしが、こぞって、わしに、まとわりつき、くいつくんじゃ」
「あら、蟋蟀も厭ですか。可愛い声で鳴くのに」
「あくむでは、ないたりせん。だから、よけいにぶきみじゃ」

「【あくむむしぐん】ですね。まとわりつく、のみならず、くいつく。しかし、くいつくすわけではなく、おどかしているんですね。麻薬常習者のよく見る悪夢といわれていますが、金ちゃんも、なにか麻薬をやっていますか」

「まやくたあ、どんなもんじゃ」

「覚醒剤（かくせいざい）とか大麻（たいま）とか、煙草も強いものだと、麻薬に近いかもしれません」

「たばこかい、けむりじゃのう。わかったぞい。わしはやきいもが、だいすきじゃからのう。よくにわで、たきびをして、やきいもを。あのけむりのせいかのう」

「それですね。焚火はやめましょう。【あくむむしぐん】はときどき、大麻の煙と焚火の煙を勘違いしたりする、認知障害というものがありますから。それに焚火は、火事の原因になる可能性もありますし」

「りょうかいじゃ、かいけつじゃのう」

「これも、わしがよくみる、あくむじゃがのう。わけのわからん、おやじがでてきて、わしを、わけもなく、ののしるんじゃ。それはもう、うるさくて、かなわん」

「だいたい、どんな事をいうんですか。どんな罵り方をするんですか」

「だから、わけがわからん、いうたじゃろ。まあ、つぎからつぎへと、わしがいかに、けしからんやつかを、ののしるかんじなんじゃが、ののしられる、りゆうが、おもいつかん」

「【あくむじこあい】ですね。自分だけが正しい、というお仲間ですよ」

「わしも、そのおばけの、なかまかい」

「はい。ののしるほうも、自分が一番、ののしられる方も、自分が一番」

「たしかにわしは、がっこうのべんきょうも、かけっこもてつぼうも、いちばんじゃが、じまんしたりはせんぞい」

「それがいけません。一番のときは、やったあ、と叫ぶくらいでないと。変に謙虚にしても、内心は自己愛満々ですから、【あくむじこあい】の餌食（えじき）になりますよ」

「なるほどのう。かいじいもきをつけろや。おばけについては、せかいいちじゃからのう」

「そんな、とんでもない。上には上がいるものです」

「それがいかん、いかん、いかんぞい」

「了解です。一応解決ですね」

「これは、たぶん、わしだけじゃあるまい。とにかくおいかけられるんじや。にげてもにげても、おいかけられる。しまいには、もうくたびれて、へとへとじや」

「追い掛けてくるのは、どんなやつですか」

「それがわかればのう。もしも、いぬねこくらいじゃったら、にげたりせん」

「犬猫ですか、それとも」

「どうおもいだしても、にんげんの、かんじじやのう」

「【あくむかいじん】ですね。こいつは追い掛けるのが趣味ですから、追い掛けてるだけで、他に何をするのもありません。しかし追い掛けてくるから、やっぱり習性みたいなもので、逃げる。ひたすら逃げるから、益々追い掛ける」

「にげなければ、いいのかのう」

「難しい問題ですね。つまり、鶏と卵で、どっちが先かということは、はっきりいえませんから」

「どうすりゃええんじや」

「難問ですねえ。これも現実の問題がからんでいる。金ちゃん、いま何から逃げたいですか」

「なんじゃろのう。おぼけからは、にげたいなんぞ、おもわんがのう。わしがにげたいのは、にんげんであるところの、じぶんからかのう」

「そうですか、それならひとつ秘策があります」

「ひさくたあ、いいひびきじやのう」

「自分を人間だと思わないよう、自分はおぼけなんだと思い込むことです」

「そんなこと、できるかのう」

「金ちゃんなら、できます。少なくともやってみる価値はあります」

「やってみるかのう」

「それで一応解決です」

「こいつは、おいかけてくるだけじや、ありやせん。わしをころすんじや」

「殺される悪夢を見るわけですね。どんな殺され方をするんですか」

「とびどうぐとか、はものとか、そんなものを、もっているばあいも、あるがのう、だいたい、すでじやな。でも、やけにつよくて、がけから、つきおとされるなんてことが、おおいかのう」

「【あくむころしや】ですね。悪夢のなかでも、最悪の部類ですね。じっさい殺される悪夢を見て、そのまま、心臓が止まってしまったひともいます」

「おそろしいのう、ざんこくじやのう」

「人間の深層心理（しんそうしんり）というものは、厄介（やっかい）でしてね。その深層のなかで人間は、殺したり殺されたりする、いわば欲望を蠢（うごめ）かせているものです」

「そらあたしかに、やっかいじゃのう。わしは、ころしたいやつは、ごまんというが、だれにも、ころされたくはないのう」

「そうですかね。大人になれば、わかってきますよ。この女になら、殺されたいなんて」

「そんなこと、おもうもんかい。わしは、おんなぎらいじゃ」

「おそれいりました。では対策ですが、ひとつしかありません」

「ひとつあれば、じょうとうじゃ」

「【あくむころしや】が登場したらですね、はいどうぞというんです」

「はいどうぞ、かい」

「はい。勝手に殺せっていうんです」

「ゆめのなかで、できるかのう」

「そういう習慣をつけるんですね。はいどうぞ、はいどうぞ。ふだんから、そう口ずさんでいけば大丈夫、やれます」

「もんだいがあるぞい。ふだん、はいどうぞ、それで、ゆめでのうて、げんじつに、ころしやがきたら、どうするんかのう。はいどうぞ、ころされるんかのう」

「はっは、現実に、はいどうぞという者を、殺すやつなんかおりませんよ」

「そうかのう、だば、りょうかいじゃ」

「これは、おんなぎらいの、わしにとっちゃ、じごくなんだがのう」

「女に襲われる悪夢ですか」

「おそわれる、ちゅうても、ころされるわけでも、おかされるわけでものうて、なんじゃろな、べたべたしてくるんじゃ」

「羨ましい夢ですね。そういうの悪夢といわないで、性夢というんですよ」

「わしにとっちゃあ、ひどいあくむじゃ」

「わたしにも、その悪夢、分けてくださいよ」

「そんな、おいしいもんなのかのう。わしには、おばけより、おそろしいもんじゃ」

「【あくむしょうふ】ですね。色仕掛けの名人です」

「しょうふたあ、からだをうるおんなかのう」

「娼婦は娼婦です。本当は身体は売りません、操（みさお）を売るんです」

「そんなめんどろなこと、わしにはわからん。わしは、かねがないのに、どうして、

【あくむしょうふ】におそわれるんじゃ」

「名前が金ちゃんですからねえ」

「だば、なまえさ、かえるしかないかのう」

「いい方法があります。芸名を作るんです」

「げいにん、じゃねえのに、げいめいかのう」
「なら、筆名でもいいです」
「さっか、じゃねえのに、ひつめいかのう」
「なら、偽名（ぎめい）でもいいです」
「それなら、ええかのう」
「では早速」
「かいじい、たのむぞい」
「わたしが、金ちゃんの偽名を作るんですか」
「そらあ、わしは、かいじいの、でしで、こぶんで、しもべで、げなんで、どれい
じゃからのう」
「ほっほ、周りはみんな、その逆におもってるんじゃないでしょうか」
「そらあ、おもてむき、だけじゃ。たのむぞい」
「では早速。金子ちゃんは、どうでしょう。女の名なら襲われません」
「きんこ、かい。かねがいっぱい、ありそうじゃのう」
「しまった、金庫ですか。では、銀子ちゃんは、どうでしょう」
「また、おんなの、なまえかい。わしはおんなぎらい、そういうとるじゃろ」
「失礼しました。では、懐ちゃん、どうぞ」
「かいじいの、かいか」
「わたしは懐爺、金ちゃんは懐ちゃん」
「きまった。それでいくぞい。かいけつかのう」
「解決かどうかは、しばらく様子を見て。それでも、悪夢に負けない、怪傑（かい
けつ）懐ちゃんになったことは、間違いありません」